

## 不登校・ひきこもり状態にある子どもへの支援プロセス

### － 家庭訪問という支援形態に着目して －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
三宅 結佳

本研究では、不登校の子どもへの家庭訪問事業に着目し、家庭訪問を通じた支援プロセスの明確化を目的とした。3名のスタッフに対し、これまでに担当した事例に関する半構造化インタビューを実施した。計8事例のデータを収集し、分析を行った。分析Ⅰでは、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。分析Ⅱでは、“高校の選択肢”“学校との連携”“「外」の世界の選択肢”“終了のタイミング”に焦点を当て、文部科学省等の政策や方針を含む社会的な事象に照らしながら、スタッフの語りから家庭訪問の状況の変化と時代の変化を明らかにした。

分析Ⅰの結果より、中心となるカテゴリーとして、【スタッフへの信頼】が見出されたことから、スタッフが信頼できる大人であるということを対象児が感じられることが重要であるとわかった。また、スタッフ側の初期のギアチェンジが訪問での対象児との信頼関係の構築に大きな役割を果たすことが示唆された。

分析Ⅱより、家庭訪問事業開始時と現在では不登校に対する社会からの目線が変化したことをスタッフは感じ取っていることがわかった。不登校に対する社会からの目線が変化し、社会全体が寛容になることで不登校児が生きやすい社会へと変化しつつあることが示唆された。